

日中環境協力の挑戦と中日センターの役割

中日友好環境保全センターフェーズ3プロジェクト
プロジェクトリーダー 千原大海

センター着任8カ月、小中高から大学生、NGO・民間ODAモニターからマスコミ、企業、学者・研究者、地方から政府関係者と、延べほぼ毎日、訪問者を迎える。「中国の環境」を巡り知識・情報・提案・意見の交流は続く。バブル崩壊から長い不況に喘ぐ日本では、隣国・中国の猛烈な経済成長に、一般の多くの人々は、羨望、商機、環境ご意見番などない交ぜの高い関心を寄せる。赴任が決まった頃、本屋の店頭に積まれた中国の食糧、人口、環境、資源の危機や楽観論、バブル経済論、崩壊論や脅威論など内外著作の主張のどれもが現実のように身に迫る。中国の国土、環境状況、援助など調査研究も、その超ハイペースの経済成長に合わせて、多様な視点、提言、ご託宣が語られ、環境で会議も踊る。

[1] 第九次五ヵ年、第十次五ヵ年計画とJICAセンター協力の行方

1994年に始まるワールド・ウォッチ研究所のレスタブ라운の「誰が中国を養うのか」発言に発して、1995年に始まる中国の反論と展開の中、1996年5月に中日友好環境保全センターが開所した。同年9月、第九次五ヵ年計画(1996~2000年)が国务院で承認され、政府は工業汚染の低減などに数値目標を導入するなど本格的な環境保護を打ち出した。2001年12月、第十次五ヵ年計画(2001~2005年)が公表され、目標年までの汚染の更なる軽減、生態環境劣化の抑止、社会主義市場経済体制による環境管理の実現を謳った。2002年1月、政府間合意によりフェーズ3は2006年3月まで継続される。一期五ヵ年を目標に相手国機関の自立発展を達成すべく進めるJICA「三位一体」技術協力(専門家派遣、研修員受入、機材供与)の継続は異例の決断といえる。これは、経済規模の拡大を続ける中国の環境が依然、地球の温暖化や東アジアの酸性雨、土地劣化と北東アジアの黄砂の頻発、東シナ海・黄海の海洋汚染など日本やアジアの著しい環境側面であり続けること、日本が経験した環境の知識・情報・技術の追加的な利用は、グローバルな社会費用の節約であり、環境改善の限界費用の低減になり、特に環境分野における相互依存がより強く広く支持されるからであろう。官民挙げた環境協力の必要性は、「日、韓、

台などアジアの高度成長の経験則」によれば、中国が「量」の経済成長の後進性を脱して「質」の経済発展へ昇華するであろうし、今後、少なくとも15~20年間は続くだろう。フェーズ3がそのプロジェクト目標を達成するのはもとより、その国内支援委員会や中国国家環境保護総局(SEPA)など日中の英知を募り、センターを拠点とする新たな環境協力の枠組み作りと試行の場の提供も、我々フェーズ3専門家チーム全員に課せられた重要な任務であろう。

[2] 今年もまた黄砂がやってくる

1月24、25日、内モンゴル・フフホトで、JICA・SEPA主催の砂塵暴(日本では西国の風物詩を黄砂発源地帯ではこう呼んで恐れる)セミナーによる日中研究者の熱心な討論に感銘を受けた。拡大する中国の土地劣化と最近の黄砂頻発にも、本年から地球環境ファシリティ(GEF)やアジア開発銀行も参加して、日・中・韓・モンゴルの国際協力プロジェクトがはじまる。砂漠化防止と生態環境の保護と修復に向けた本格的な国際協力には、日本の環境省をはじめ関係省庁・機関とJICA専門家チーム、センター黄砂チームの呼吸の合った支援も佳境に入る。



黄砂に埋まる北京郊外の村
By Ron Gluckman/Beijing, Fengning and Langtougou, China

センター拠点の環境協力が、アジアと地球の持続可能な開発に貢献するのを確かめる。今日も、多くのセンター訪問者を迎えるべく、ここJICA専門家チームはスケジュールの調整に奔走するのである。(ちはら ひろみ)